

荻野 検校 顕彰会
愛知県立大学文字文化財研究所 共催

平曲シンポジウム
譜本としての
『平家正節』報告

日時／平成二十三年十一月十二日（土）十三時三十分開会
（十六時閉会）
場所／愛知県立大学 学術文化交流センター二階 小ホール

平曲譜本研究への一提言

～平曲シンポジウム「譜本としての『平家正節』」開催の趣旨～

犬 飼 隆

平曲譜本の基本的な性格は、晴眼者が平曲を稽古するためのテキストである。平曲は、平家物語を声で表現する芸術である。平家物語は、その成立当初から、声で語ってきかせる形態をもっていたと言われ、写本に読み本系のもとの語り本系のものがある。平曲譜本は、語り本系の本文に墨譜（「博士」とも。『平家正節』では「象」と呼ぶ）を付すことにより、語るときの声の使い方を指定したものである。平曲の専門的な語り手は盲目の検校たちであり、声の使い方
の伝承は口伝で行われた。平曲譜本の作成は、晴眼の愛好者たちが使うことを前提としている。伝えられている譜本は、平曲を学ぶ愛好者たちのそれぞれの受容に応じて作成されたのであろうが、『平家正節』は、そのなかで「当道座の正本」とも言うべき特別な地位を占めている。

譜本の象は、ある熟達者のあるときの語りの記録という一面をもっている。昭和年代後半に藤井制心氏が当時名古屋で活動した三検校の語りを採譜した。採譜は十三年を費やして行われ、作成された譜面は標準化されている。しかし、本シンポジウムにおける藤井知昭氏の報告によれば、採譜の開始当時は三検校の語りがそれぞれに異なり、十年位たったころ均質化してきた由である。三検校の残した別の録音では実際に細部が異なる。声の芸術において同一人が常に異

なるパフォーマンスを行うのは当然のことである。語句は伝承に則るとしても、一句全体、曲節と曲節との組み立て方等の表現が変わり、声の使い方もその都度細部が異なるであろう。この事情から、『平家正節』は、荻野知一検校による平家物語詞章の一つの解釈、その解釈にもとづく一つの口頭表現の跡であると言える。

文字で書かれたテキストは、読み返したり、時間にとらわれず熟読することによって、内容の十分な理解に達することができる。しかし、語られる声は、時間軸に沿って展開する一次元の音列として聴衆の耳に入る。語り手は、聴衆に物語の内容を理解させ楽しませるために、その音列の表現に技巧を尽くさなくてはならない。譜本に付された象は、その技巧を活性化する手がかりとしての記号である。記号であるから、それぞれにさしあらわす声の使い方が標準化されている。口伝えや、録音を聞いて口まねをするのとは事情が異なる。同じ象から、熟達者なら、良きパフォーマンスを活性化することができ、学習者は、その域に達しようとして、象を手がかりに努力する。学習には指導者の口伝による補助が行われる。そうして象の示す指示に近づこうとするのであるが、学習者は生身の人である。そこに、象に示された指示と実際の語りとが乖離する可能性が生ずる。

すべての声の芸術の基盤になるのは言語のもつ抑揚である。今に伝えられる平曲は、中近世の京都方言にもとづいて曲付けが施されている。曲節のなかの「素声」「口説」の部分の抑揚はその言語アクセントを反映している。しかし、平曲は音楽であるから、曲付けのために言語と異なる抑揚が要請される場合もある。また、文意を音声で表現するためのイントネーション、プロミネンス等の要素も反映する。その上に、譜本の伝播と受容に伴う要素の介入も無視できない。口頭表現においては、曲付けが京都方言にもとづいていても、音楽として語るのであるから、学習者の方言が反映するのは自然なことである。象の読み取り、あるいは口伝において、声の使い方が変容を蒙ったであろう。それが譜本の象に取り入れられて新たな規範となる場合もあったであろう。

また、それぞれの譜本自体が一つの写本であるから、そこには書誌的な問題が生ずる。平曲の墨譜・象は、謡曲の墨譜にならってつくられた可能性が大きい。平曲に適するように墨譜のシステムが整備され、『平家正節』の象が成立す

るに至った経緯の解明は、平曲の語りの本質を知る上でも必要不可欠である。その一方、いったん成立した譜本は、それ自体が受容の対象となる。書写されて流布し、その過程で、内容に関する解釈が行われて変容する。写本の常として誤写があり得るだけでなく、受容者が再解釈を施して語句や象を変えることもあれば、象に込められた声の使い方に關する解釈を変えることもある。そのような問題を考える上で『平家正節』は無二のよりどころとなる。

平曲譜本は、学際的な研究のよき対象である。音楽学、実演者、国語国文学、書誌学、それぞれの立場から解明した成果を総合することが望ましい。まず物語本文の解釈が前提になるが、個々の文脈だけでなく、一句全体、平曲全体の構成を解明する必要がある。さらに、他の声の文芸との比較、あるいは世界の民俗音楽の一つとしての位置付け、また、譜本そのものの成り立ちについて書誌的な考察、成立した譜本の伝播と変容の実態、記号である象から、いかにして声によるパフォーマンスを活性化するか、象の読み取り、教習、口伝はどのように行うか等の諸問題について、研究者が知見を共有することが有益であろう。

筆者が最近注目している現象を付け加えて稿を閉じる。尾張方言話者と三河方言話者の語アクセント生成を観察すると、尾張では語頭のピッチ曲線がアクセントの高低にかかわらず水平に出る。三河では一拍目が高いアクセントなら語頭に昇りがあらわれ、低いアクセントなら降りがあらわれる。尾張の状態は、関西方言話者が声を出す以前に声の高さをコントロールする筋肉を作動させることの範疇に含まれ、三河の状態は、東京方言と同じく、声を出す運動と高さをコントロールする運動を同時に起こす範疇と解釈できる。この違いが古くからのものであるとすれば、京都方言を土台にして曲付けされた平曲を尾張の人が習い江戸の人が習い他の方言を話す人が習ったとき、抑揚の習得に得手不得手が生じたであろう。平曲の伝播と変容において、このことが影響したのではないかと思われる。